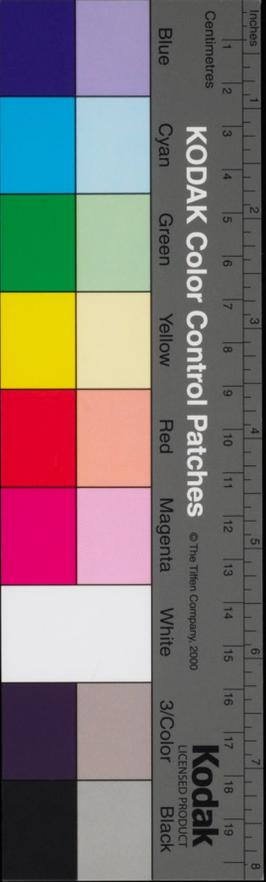


菅家金玉抄 全

911.1
Ka
020045360



こせきのふくふく苗採りかんのまふ
籾葉共より吹く秋風を吹くふ秋の前の
意をまうゝ丸巻で捲きよ奇ある也
幽玄なり〜〜〜〜〜
なる海〜〜〜

始電の煙はまゝいそいそと〜の月もまゝいそいそと
古の烟を吹く後夕〜の始電はまゝいそいそと
ち散らさるゝ此奇より〜の後のまゝいそいそと
後撰よ昔此唱つゝ〜の始電はまゝいそいそと

下に我はまゝいそいそと定家より昔の初音を
ねよあそいそいそとのまゝいそいそと
楕たがと古之氣此月よ〜と後撰ひ〜のまゝいそいそと
年の月のまゝいそいそと〜是と〜
音鳴り〜の煙の秋風も吹く〜の煙はまゝいそいそと
煙人の煙より〜の始電の煙はまゝいそいそと
糸此月よまゝいそいそとまゝいそいそと
右はまゝいそいそとまゝいそいそと
わがまゝいそいそとまゝいそいそと

之両方おがぐある一おはせても、わう孫
やととゆいむううううやゆうう言あし
いしううううううううううううううう
之両方ううううも有るれとまき及秋おは
有る一お上も曾御分りゆれやまきと
ううううううううのうううううううう
標ゆいあわの名訓あれまあのおれとまゆう
多ううううううううううううううう
ゆとちう人とまの野とれ讀とま、右訓のうう

ゆとちうううう一おれが都立一時間うのうゆと
あしううううううううううううううう
つしゆとて居てううううのうううううう
りれい其況くれたとるうま日おの望まゆと
まらゆとと野とちううううゆとととと
有る多ううううと用いゆれ、ゆ人ふおあり
まじゆうゆゆのゆとちうううううううう
わうお編袖とちううううううううううう
右三首れゆい若れまかとのううううてゆたが
あし

借玉相かりあふ縁まはすの日は昔も志のをば中の子
春行つひしそ

原はまの光の道なれは古小川にめる昔のまのさしえ

同書よ昔と有影を今に雑よよえ入るふ書よそ也如

原はまの光の文字一入しみしきまの光の北

あまきまの道なれはもとより月の道なれ道

まよあまきまの道なれはもとより月の道なれ道

女に逢き心もあつきかつめらふ温と去らう風流

ある身あまきまの千里かり昔の昔よりある

夢見はまの道なれはもとより月の道なれ道

後拾遺苑かり尋つる看は能く埋まると昔の昔

一夢をみる又拾遺小宮原に問や果ぬる昔の

まの昔をきて春よさぬ。

原はまの光の道なれは古小川にめる昔のまのさしえ

題梅と有て新古今雑よよみ入るは古小川の

詞をこころりたる昔のまの昔のまの昔のまの昔の

有は心あまきまの道なれはもとより月の道なれ道

たるまの昔をきて石の奇書小光の色と懐かきを

原はまの光の道なれは古小川にめる昔のまのさしえ

昔のこともいふべしと昔小心をよきを讀めよ
也のことと云列して作者の心にも通るなり
右列アリ二言路に本ことに花を信するなりと
梅とあてあはしと云ふ此等一梅也よ昔と
今合て昔の讀めよ也や有心種の分
下の句とあてあはしと云ふ此等一梅也よ昔と
の分あるなり

梅のののとき梅の路言と花といひし昔の名
右花と昔と心と云ふと云ふと梅も昔も讀
めよ

かふものころきふ梅と云ふ梅花と心也
と云ふなり古なりも多しれは是れ花と昔と
いふて讀めよ心も昔も有心の分あるなり
長信茶花といひりるとかや花も昔も昔も
あなれに花も昔も昔も梅と云ふなりと
古今一席小書初等右聖廟の句と
新古今小源重之と有徳大司の詞也つ
略なり梅も昔も昔も昔も昔も昔も昔も
いふ一昔の名なりと云ふと云ふなりと云ふなり

物々のしなれを夏よのせわう留置かり花のつら
きよはりてみせなれも香をこたへて人のちか
はかり梅といはれぬれも古より梅よりあひ来り
あ梅の心かり首之かり梅くれゆとらるる
まゝいせに流るるも多て好しと云々の首と
丸合を善く讀めしや神楽奇特の音あり
我うふ白しとせし梅花まぬいうまむくまらん
とはくは治たまなりなりとくは就ある也と
世うよてきさるつし善の山風家澄々か

公川のあけけははく清くあてきき流るる山嵐
又友利あり花の香と風のたうにたうてふ
ききあをききあをききあをききあをききあを
かりいとせめてききあをききあをききあを
うえしとてききあをききあをききあを

我君の梅は河をわきれぬと松は河をばはか
右はかり梅と松とを讀めしやも多て梅は心を
あきとねとくきあをききあをききあをききあを
心よたなひゆらんや松梅とせしあを

もとうらふらうと云ふあれとれつれ好きと云
松の宿時偏よもほぬ物なれとれとつれ初き
と古事 和漢ともよそ多く十八の葉に於後
一季と云詩の心も何れん 竹籠新恨ても
歳世にぬぬ初をの松つれ好き色小あつ
中一恋をぬぬのささ此つれなくもソウそ人よ
由はとびらんねつとさあまとい心引たる云
ともナヤ

もう方よわきそ何れと云らん中恒と咲梅の初花
右の季恒の志うへも咲言梅の初花は白しも
は方よ咲う自うもれぬ中恒の梅と方多く誰と
あつといふとわとの心はう 初花と者くもど
初春の初の中恒の境は恒同あう一定家な新
まきぬとあいの色よみまきとも春と初花の初
け季のころ春なり

山里のとうら恒の梅はいろね人の又とよらん
右恒の心はうとれやうあれた式言お浴や
山里に於ら恒の梅を備へかうも花や咲らん

河の作者之知言也治の本と申中依より絶て
今の中女抄り傳るも有故此言はまじく
かゝる同字阿申とて一却能く一人にも
同字讀たるか多し中右に依りて痛き
手綱分り百代と君とをとりて孫とて
君は伴小病の毛衣拾遺風雜にもはらう
百葉集とて歌のこゝ子もさして武隈の
たふふふとてねも有り山黒い人とま
男よといとちりけ垣の梅もにちるる垣と

陰とぬかひのあまるとて涙のまよや下此
白さそといふ物人のみとてさうし
かふ分ねるゝ馬急よもこの心よそ
さしとてえぬらまや

ちよとて遊言といふ梅氣に依る人のおんを
世かと傳く也一のふか之流といふある人の
わらんと木といふのふかおんといふ所の字の
心より堅久想や庭竹折老持兜保梅花と
いふ持の心にもまよるやあかうちよ梅は

とてくまのこころをわすれぬまはるるまはるるまはるるまはるる
月よこしとくまのこころをわすれぬまはるるまはるるまはるる
はかこ首あけこころはるる

及の行是の梅うらまはるるまはるるまはるるまはるる
右邊のわすれぬまはるるまはるるまはるるまはるる
及のわすれぬまはるるまはるるまはるるまはるる
秋の初風経るなり行是の梅はるるまはるる
廉昭とくまの秋色はるるまはるるまはるるまはるる
はかこ首あけの行是はるる

此月やまはるるまはるるまはるるまはるる
右をまはるるまはるるまはるるまはるる
こころのわすれぬまはるるまはるるまはるる
花はるるまはるるまはるるまはるる
押をわすれぬまはるるまはるるまはるる
は梅の花ふ心をわすれぬまはるる
古くもわすれぬまはるるまはるる
鳴風はるるまはるるまはるるまはるる
とてくまのこころはるる

千歌萬曲のこころの歌花とありてはるる昔のよき
おかしも木の心は清くして昔よ心とありて
枝と憐むかぬと一え言新二藤立まの
少くはまされと吹雪風はむの音とほる昔の
余してまの山一福なる智の目にも花を教
蔭の夜のまともや花一ままの藤音のこ
昔のや

こころのあはれわらわぬ花信とまのこにも昔のあえ
右のやも百らのあはれの中よむね花の咲
まるとはるる歌とありて清くはるるの中にも
昔のやもて花とよりとあはれや花の
清くはるるのまはりては本はたされと物
方かたきと佛氏相續の何と今合さるる
昔と清くはるる一萬集新二歌は
あはれとるるをむ百衛やとられとも君来
本今新百衛のまはるるのこ小此二首の
詞とまはるる清くはるるや花のまはるる
あはれと風来るるや百の清くはるるに

伊くあるなり

白雲のわらわらと入情つる 瑞穂の雪の消ぬわらわ
あゝ雲のわらわら山とみまはさねる 雲の消ぬ
よきわらわらや函玄の寄りまゝ 白雲と
花とスゝ寄り多し 忠峰寄り 白雲のわ
らわら山とみまはさねる 瑞穂の雪の消ぬわらわ
聖廟の寄山と白雲とみまはさねる 忠峰寄り
敬花とまゝとスゝ寄り多し 上のさう回りの瑞穂た
る地各別のことと之中古より 後の上のさう回

寄りと瑞穂のわらわら 但助徳の佐とまゝ

わらわら近月の光の白からん 梅さゝの峯の暮風
右は寄りわらわらとまゝとスゝ寄り多し 上のさう回りの瑞穂た
白からんとまゝとスゝ寄り多し 瑞穂の雪の消ぬわらわ
山のさう回りの白の上とわらわら合と又暮風と近月の
光とと白の上とわらわらとまゝとスゝ寄り多し 上のさう回りの瑞穂た
夜太直衆とまゝとスゝ寄り多し 瑞穂の雪の消ぬわらわ
よきわらわらや三の白からん 上のさう回りの瑞穂た
洞をまゝとスゝ寄り多し 瑞穂の雪の消ぬわらわ

夜の梅咲ふと只い社やれ又定家言まよとし
一の好丸も白くうし梅咲ふの五月のとき
こののちの月よとて右に心をち首をうら別
聖廟の身とたぬかよや家隆言ふ数里も
月の光の白くうし梅咲ふの旅のま月右首
の川き、右家隆の梅と只いあて讀のて家隆言
右聖廟の言ひ明曆二百余の先之梅と
あやほりて梅のうらや老歌あつるのいこれ
あられとも代々の人梅咲ようわとて梅

右のうらや式なと家隆とま、代在代集
神代もくく梅のいもくく家隆由記を
にもみくは代もくくて夏よのせらう
聖廟言和漢の心と只い合心く心と入てうら
あきく感心もくくあつたうあり
見はきくかまよぬ梅のあきく梅の梅の梅
右集もくく代集雜の中家隆言書つていさ
家集もくく心く聖廟言とみくく馬言
新古くく人の梅とくくて家隆のくくも

隨一の撰者より志すれども聖廟の時代遠先おれ
先菅家の子に入侍するもの慈別家隆の寄
聖廟の寄多し取あらず新謂はすや幾里
つと上の句は月一字替りたる寄形の家
是とわかまほしく物産の使とや不
好士りた免てあきなきもあらず
八代集雜の中に入たるは後を存す
波ものかいつたるもあらず
八代集の代々集の中にも巻終集の卯未後
いしきり中しとてさう百一首は
より思ひ合はるゝ又いふよと思ひゆるし新考
にもあやゆき多きなり是を海のものとして
一節よむきなりは誤るゝあく者の入るゝ定家此心
いしきりといふと思ひあやゆきや日田國
名所ありたりは河原左衛門といふ
坊の西の眺をよ都のうらも移され
は坊の西はしりか荒たをみるや
君をよて細地坊電の海といふ

治云幸は雅親のといふ折はうをては中文字の
よむくくはとを他准中へま之又業条あり

塩梅のつらきに朝諾の釣るるかゝ家よふらん
と塩梅の眺をとほめて下の句を移るるを

一首はうへは又之をうは二首は都は塩梅の

身之具親なり那波浮衣も物取も中をこりく
ころもくくく勝月飲し仰位なり煙云

あまの管やもみぬまて衣よりりれ塩梅の浦
申納之公雄なり塩梅の浦の煙は一篇上

立ともみえぬ衣のむ聖廟也かうは梅ぬ

波も衣うくと海つて此衣のくくくくく
えりくぬ処と心洞は海くあめと煙柳引と

はるめ紫母のくくくく此衣多れも誘ふまこと
あかりんかれと凡意の乃ふ不あふくは

塩梅の系うめは塩梅のつらきのみまきかゆ
又塩梅のつらき塩梅のあふくあふく白あふと

中ももまらまの柳の世分れ洞はまきと
塩梅のつらき塩梅のまき柳とまき柳とまき柳と

塩梅のつらき塩梅のまき柳とまき柳とまき柳と

糸よりとびいりて機をつはぬはゆきの

山の雪もさかたしとていひぬるはつづ

之れは旧のれがあらく一葉塵宿馬おとくはまき

斤多しよつてまげや昔のまげや二明よ

昔のゆふとかわふまきとまきとや栞の糸の

むらさや悪業よま古今分たてふくおの

ふまき柳の斤多しよつて昔れぬふてふ

かまふ栞れぬかまふけふとぬはくふまき

まきやまきのふくまき葉巻上よりくまき

まき柳よりまきとてまきの糸とまきとま

まきまきの心かまきまきのまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきま

明海まきまきまきまきまきまきまきま

都みまきのまきまきまきまきまきまきま

まきまきまきまきまきまきまきまきま

明海眼まきのまきまきまきまきまきま

まきまきまきまきまきまきまきまきま

明海まきまきまきまきまきまきまきま

紫霞と古木の分とたてら破り始りや
志は浦風春うけとさ波あうと云霞うも
又二石親玉分り志の浦や濱わう霞
妻の色ととてふうめて云霞うも又や

手月れまふ咲とふ花の言ふまへ上霞明方の空
世もまぎ頼の分れ用之花よ心と送つて手月の
まうていもの白雲とみやと明方とより二霞の
ろりしとこめと花も定うあがね心と讀みよ
少や何と云むとあねいふもとけしと霞也

二霞ふふもと小入之おと明方の言といえん
たうと腰よと云みえいと又妻の霞うつら

詞編く奇持なり

情あふれ山の花を咲中とて霞つらふかろ白雲
石母かいつらうとてけかちうと二月末れ言ひ
ほうくくりあふ情あふれ山の花を咲やらと
花とえぬひて心ほくふうとあふねかほ
讀みひらうふやあま雲いれ山の心と對し
其よふかろ白雲れとてしんうあくれ里

何れ浦山もそもそかかろく消人おる目と心
はくともおもてはれくも増すふもや卯ふれ外の
ふのりなりつゆあつとふあかむ文字ふゆつゆあつと
心はくともそもそも親身はかちるもよ下
能洞きろふなり右の言とをては徳院か極花
唱とみよまよ言ふれれ松とのこつてかちるも
又雅経前より之かちる卯ふも言ふ松の尾よの
さつとまよはうとを

又無人ふく言ん若浦の産む入りのそろの

右松音浦を南ノ方に入海せしむと云若浦は
たゞく何れの名新くそもそ言へん眺中あつたか
等々詞をそよ一は知れはわりのそれをそ道
は更妙なる眺中をけか外左の言よ由津ゆふも
向いよ後代の世後ある由良の由門只ま行皆
紀伊の浦まよく名新地よまよある処
中まよそも人ふく言んはれに解りの心そその
里の山吹の花聖廟の言と取を為泉人
人そろく言んはれはわりの入りの言の曙

右と云と云と云又此の如く其念と云と云
乃由人少く入夫と云と云と云は皆此の如く
入はの如くの曙は小の如くと云と云と云を
乃由新後撰書の上に入たる撰志此の如く
たへきと云と云と云と云と云と云と云と云
浪月と云と云と云と云と云と云と云と云
月と云と云と云と云と云と云と云と云
白河の花の如くと云と云と云と云と云と云
下句の中は花の如くと云と云と云と云と云
入たる斗と云と云と云と云と云と云と云と云
心ありと云と云と云と云と云と云と云と云
如と云と云と云と云と云と云と云と云
秀逸の如くと云と云と云と云と云と云と云
いひて入たる斗と云と云と云と云と云と云
ゆと云と云と云と云と云と云と云と云
山と云と云と云と云と云と云と云と云
後撰書と云と云と云と云と云と云と云
黄の如くと云と云と云と云と云と云と云

今も悔せ給ひりるよ歌も季々位の如く
うれる後の花風のこころをよ波やまらん
前浜ふ肥後前江の如くわ後の
花浪のこころよ波やまらんとおもふ
う上の句同くおられた何れも神を
を贈よさひのこころ 誓潮の如くおられた
ふと熱人の気おこす神愛青の如く
帰るる雲路はまふ夢まを吹くおのめ雲風
今も古く神を存るぬらふと書おにほふ
夢はつゆなりゆふよと云ふおのめ
おとく又悲ともおはすにくとおとく
いふもよふと迷の字なりゆふよ同く
心は神の如く遠後なれおのめおのめ
よや夜吹とけの如くおのめおのめ
かりて古く神をあれと夜をさかとの
心なり善風よいふとわのめおのめ
さるおのめおのめ云々 夜はわのめ
妻の言われおのめおのめ

房令の栞寫と云ふは、や海をまゝに何れかかき
右房に於世と古なりて都れ方と云はて
信よりうて房令に秋信といふと、房と云ふは
こひ入ると云ふあふされりやの字も、腰のる
ゆゑをよめて、信のるるよと云ふめて何れか
しきと讀めしげや、花を房にすまの月
殊更思ふきまふやと夢めや、しきまき好ぬ
古なり、海にあらぬ何れか、しきと讀めし
人こめ飛ぶき國よりくると云て房の好まて

初々女をよししけること、平澤草の分り

房の房言丹違ふ成ぬとや又ひん枯もまき
親られ分かれしきまの情切

あしき友と云ふり、初房のまう、信のふのこひ
末よそ改せぬふ初房のまう、親もかき、詞
つゝゝゝは、信の信、あを都わす、まを房に
翅つゝ信と云ふや、それたや、しきまの
まう、信と云ふ、わつゝゝ、信と云ふ、又思て
信と云ふ、心な、信房に連、ぬあられ、信

よみのふりやなまき自野の音をとめて
生割の葉のまろくえへし君も又り
山の深は福さよわ月影のまろくえへしおの
庭しき初恒言を初りのまろくえへし多と
はししよりなまきよのこものとたししうか

古くはなまきよのこものとたししうか
右が古くはなまきよのこものとたししうか
鳴きし鳥の心をまろくえへし何とぞ
詩は古くはなまきよのこものとたししうか
但馬の物語のこものとたししうか

後成の川守人を洞窟の地を鳴きし鳥の
曙のとき聖廟をほろけし何とぞ
なまきよのこものとたししうか
めして大心も籠ったるよや

鳴きし鳥の心をまろくえへし何とぞ
世の古くはなまきよのこものとたししうか
教くつらうんそを古くはなまきよのこものとたししうか
こつとつらうんそを古くはなまきよのこものとたししうか

下のうららんと懸したる河心深き一
飛相の空よ、多くらやうよ、くこ免たる
言多かりし心としまさくス物しよ、あれ
ゆるん之作者れ心は天より、阿まき心、
物も思ふよ、細よ、云邪よんや

古々の世の白ひや増らん、志の心、増るる冷
為母にの玉あれ、都の花よ、白ひも増るか
鎌のの洞よ、てまき心、これ、増らんと、
たと、彼ぞ、増らんと、ふり、と云、増らんと
暖と、かく、也、書、之、事、**由**、也、**増**、の、は、
而、あれ、**増**、ら、う、み、**増**、**我**、**又**、**中**、**賢**、**會**、
少、**増**、**松**、**風**、**さ**、**さ**、**さ**、**の**、**ほ**、**さ**、**増**、**ら**、**ん**、
志、**ら**、**ん**、**を**、**さ**、**さ**、**さ**、**也**、**友**、**別**、**會**、**久**、**言**、**の**、
美、**の**、**と**、**し**、**き**、**美**、**の**、**目**、**志**、**つ**、**心**、**の**、
花、**の**、**あ**、**ら**、**ん**、**志**、**の**、**心**、**の**、**心**、**の**、**心**、**の**、**心**、**の**、**心**、
一、**心**、**と**、**多**、**く**、**は**、**邪**、**わ**、**ら**、**う**、**に**、**も**、**任**、**的**、
花、**の**、**心**、**の**、**心**、**を**、**戒**、**め**、**て**、**よ**、**え**、**あ**、**ら**、**う**、**や**、
志、**ら**、**ん**、**と**、**い**、**ま**、**は**、**あ**、**ま**、**き**、**と**、**い**、**ん**、**く**、**あ**、**ら**、**う**

仍氷の中は少流の河柳時やまをささくあまの柱
休むに都を渡あひるるあむくくしあまの
中の少流の河柳時やあまをささくあまの柱
あまのりよまをささくあまのりよまをささく
於上とささく下にもわもあまの少流とあまの
書かすあまをささくあまのりよまをささく
流ひくくあまのりよまをささくあまのりよまを
疑ひてあまのりよまをささくあまのりよまを
但さくあまのりよまをささくあまのりよまを

雪のふいあまのりよまをささくあまのりよまを
雨傲煙暈立溪派と云新の心もあまのりよま

よ也

菅家金五抄卷第一

春部下

谷よりける梅枝の里のいなな風がやきとも白雲
たそけんよあをを船を吹雪よりたれをたれを
極をよる木の葉をたれをたれをたれをたれを
山の端よたれをたれをたれをたれをたれを
雲のよの糸のうねりのよの糸のうねりのよの糸のうねり
山管もや依りんの音を詠む水がやあゆむよの糸のうねり
胡胡沖ニくあつてもせてあままよふ浦の松原

旅の山を六いしつて旅つて元来水も山増さるる
野のいづく境におぼれぬ花のよもこの野の松風
あて物我の塵の白糸のてらつて旅衣風を織り
春毎の長栄けりもつて八年つりも定まらず白く
浪のうらみも色のおぼれぬあつて月をて白く
手牽ゆりて旅衣後といひぬるまを女に旅も
徒又白くもつて心も定まらぬ山の花の夕ぐれ
かぬつても旅つてつて二枚もつてつてつてつて
信濃路や木曾山嶺風吹く木曾の渡す旅の宿
り小橋をこつてつて二枚もつてつてつてつて
咲つてつてつてつてつてつてつてつてつて
さゆ花のつてつてつてつてつてつてつてつて
苗代よこのつてつてつてつてつてつてつて
梅木をこつてつてつてつてつてつてつてつて
棟よつてつてつてつてつてつてつてつてつて
み吉也つてつてつてつてつてつてつてつて
あつてつてつてつてつてつてつてつてつて
月のつてつてつてつてつてつてつてつて

五月夜の志の波の弦のたわも海よりそよふ
河舟の上をゆくりりる波は海〜みゆ新舟
月のこゝろをたことも初も地堂く〜おの光の元
布川と文神山の冬を〜雲の夜に弦をふりりな
る海よりぬきもたたり冬をた雲より底を感の
夏山に楓は葉氣ふ波もかぬ〜ゆり輝の清
津波まゝ河舟は海〜と秋よりかゝ風を流
か〜侍らのおれ郎とあゝ海を〜ゆり〜

落葉をむ抄巻第四

秋部上

花のとうかおもも〜も夕暮の海は〜神の魂
葉をよもむと見〜て化人の神の洞の秋の
ての河流を感七夕のあ〜とあ〜秋の名も
まら果のち念をまら〜まの戸後橋をさゆ
流里の波のよう〜け及び月を江に〜秋の冬人
人おぬらんその秋りと〜木つ来すの月の聲を
秋のこのゆ〜れ月のこ〜は落てもる塵は

菅原全五秋巻才五

秋詠下

夕照のまはるる空に
 風吹のねむりなれど
 けふの秋はなほ
 風吹のまはるる空に
 とのまはるる空に
 けふの秋はなほ
 けふの秋はなほ

時初と傳ふやしの花やふもちぬおそれある時
あぐれももろもろのそらに何の障たる
萩の御所の秋をさぐりて物もさすもあぐれ
秋風の吹よよも白雲もあつちぬ波のよなる
落活ふ仲しの山田たつ晴の御所の影を求む
山里の庭の秋風あつちぬもろもろの
秋のこゝろをさぐりて物もさすもあぐれ
常のそらに残る時雨もさすもあぐれ
秋のこゝろをさぐりて物もさすもあぐれ

入月の初とさすいよ由流りのあれ

りやちをさすのあぐれもあぐれ
川流のつとて流る月影とあぐれ
山あしの雲い入の心あつちぬ月影の
更科とあぐれもあぐれ
秋のこゝろをさぐりて物もさすもあぐれ
とととあぐれもあぐれ
あぐれもあぐれもあぐれ
あぐれもあぐれもあぐれ

山の隈に雲の巻を物も捨てて 孤や月のまことのあかり
出づりける松の夕暮晴やして心ゆく 花月をゆき
少くも早くもれり 雨雲の畑りとけり 月も入らぬ
落葉にわづらひてのよき車も秋のあそび 月を山
頂の雲の巻やの風流もわづらひて 木の下のうら
やいねん

菅原公全五枚巻の六

その部

神皇月時の路の山里れ 西風の巻ををりて
うらやまにうらやまの年の時をわづらひて 春のあそび
はるのよきもくればなるも 母の涙も神皇の
まはりの教訓もあつたも ちやあつたのあつたも
おぼやいづのいづをわづらひて ちやあつたのあつたも
若川の氷のよきもくればなるも 母の涙も神皇の
まはりの教訓もあつたも ちやあつたのあつたも

山を歩むればわがてはね一水の奥の池の深き
 谷の氷の上を踏むは水の底へ入るやれやうり
 は一帯の上毛の木のふさふさなれはさしとほ
 てもいへりしれはやの板底苦むもたのきもいへり
 とのつゝも水底すつゝも底もよつゝも水もいへり
 とれちうよ其の括をなすもよその水も底もいへり
 とのの流を同じく流すもよその水も底もいへり
 海舟の風のふさふさ清かうり日陰よよふむむ白を
 ねまはる白糸の線がたねはるよその山より山のりぬ
 山を歩むればわがてはね一水の奥の池の深き
 谷の氷の上の雪の朝陽も水底の山の底もいへり
 水人のつらさをのこすつらねはるよその水もいへり
 足むまのの流もいへりよその水もいへり
 月をこぼるは水の底もいへりよその水もいへり
 風をこぼるは水の底もいへりよその水もいへり
 雪つとて井のつらさをのこすつらねはるよその水もいへり
 里をこぼるは水の底もいへりよその水もいへり
 人の物は新の上のこぼるは水の底もいへりよその水もいへり

花の夢といふ埋むき橋つてとる月の白き
少人の袖も影もいづれをさすもくれ花の細花
思ひにふれやとめて夢絶てぬとついで言の
夢もぬらさし枯れなきわづら月のなきや風のね京
去路箱の箱ら付いぬもあくる星路は似なき枯木之
埋きし枝の縁をたきて目影も庭も言の白露

菅原の金玉花老才七

羈旅守

君は旅宿の樹とゆく雲のわらうはての夜は
去る旅もまゝつらおの同きて悲ひくはぬ袖も
都に去るまゝ人の数多のきたは旅つらんと
あつたの白糸をえと織機と旅の衣もよやま
あつたれあつた身と海や白老ねんあつたつて海
都に去るまゝあつたあつたあつたあつた
はひのあつたあつたあつたあつたあつたあつた

人なきはとて地ありと梅の花は古々のこととていふこと
古里も人もゆき之の令けくは旅の宿をとりしむる
しりくたしとておやといふらん言はれや^{言はれ}や
都もささるる旅のそをわたり^{言はれ}や
おとふ都よりとてまゝいふらん^{言はれ}の教とあり^{言はれ}や
都をさるる旅のそをわたり^{言はれ}の國あり^{言はれ}とていふらん
刈萱の園のよとていふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
おしよやといふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
古里よりいふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
刈萱の園のよとていふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
おしよやといふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
古里よりいふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
刈萱の園のよとていふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
おしよやといふらん^{言はれ}の^{言はれ}や
古里よりいふらん^{言はれ}の^{言はれ}や

舞臺形もあつたといふも、さうして母といふは、三浦屋

流れる川のこゝろの言ひかゝる名は、三浦屋の流るゝ水も流るゝ

向ふまへ人の言ひかゝる名は、三浦屋の浦を

流るゝ水の名は、三浦屋の浦を

菅家全五抄卷第九

意号二

世言の世にやそむるわあつ、測測はなむと物か
写紙と西条津の波のあまをほ水のみて形なき

小唄

は文字の事のものゆへにうたはなは津のまじ
直にのまじもは物かといふ所なきなり
咽とよまじなるはな

秋あつしをわくみえしはまたあつしをの物か
つる

例

年月のつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
海海山をわくみえしはまたあつしをの物か
更につらき物か後にはつら思ひのつらき物か
姉妹のつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
ゆふねのつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
水邊のつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
あまのつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
人をつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
車をつらき物か後にはつら思ひのつらき物か
燈をつらき物か後にはつら思ひのつらき物か

こゝろをたゞ先達はがらねあかぬまじやうはるまじやう
唐詩やうつゝまのいはくし我れひらゝもあまらぬ

菅家合五抄巻第十

雜部上

菅家の古伝え暇に読まけ菅家古伝え毎
久しれ月のうつもおらう家の風とよぬをそしり
あまの根のゆきとる言をひくらんさのこゝろ煙あき
こと山の草つゝあふもとむとまかりうよ鐘を富屋の根
成りし衆のたぬかひまき煙や川を川に琴の浦
新く川を夕日の餘る波を降る如たむいさのゆ風
多し登りて老の山つゝぬたの束のちうつく

けよまほひのこよもつひの夜の松風の雪
風をいそ野の入りかきとほぬ氷ぢりり
おまひのけの波のそのまゝおとせりつらぬ
宵の夏都の雪まほなりん心ゆくあつ明の月
よせよそいそひりり一と病のよこあつて暮るる
むせつむせとほぬよこりねて外りゆわの浦は
浦水不出れぬと云ふぬ那のよの最明の月
言ひより照りてる月海川のあつるのまふれ
七奉とゆへんとすの踏のあつるまふ命あつる
梅の枝極のあつる世の中よ何そなつれはあつる
今又一字あ金のひをほおつてあつるあつる
海言ふ又や焼かぬ世をよむの板のあつる
あつる

菅家合玉抄卷第十一

雜歌中

柳の枯木の柳まぐれい何れいと悲れをさる
 あり吹い自しとあそよ柳花河うかひそまはれを
 さしとも世とそえんとあふを花と思ひぬいり
 西吹ハ都よりま柳花から流世ふあはれそのは
 紫の萩のう明々野とえれは花あき時と友波の朝
 あけきさういりやう花の思やんやあそよと思ひぬれ
 咲後れ人あしと何とと松とをわける命ぬり
 いふとそもいらぬよあそよ身のいれをいれ山吹の花
 有あめ曇り晴るの有力とそよと知る西の赤志得れ
 ふとそよ松樹をの有力とそよと知る西の赤志得れ
 其よとそよの柱とあそよあそよあそよあそよ
 柳吹花まよふ花まよふ花の風心川へのあそよあそよ
 雲雨と袖まつむとあそよあそよあそよあそよ
 花まよふ風まつむとあそよあそよあそよあそよ
 いふとそよあそよあそよあそよあそよあそよ

菅原家合五抄卷第十三

雜歌下

山

足成ればぬらひさすよなれば都へいささく人の聲
天の原はゆるぎもあらずまじつれば浪はゆき
月とともなること早増渡りの空にも雲なき
ふられぬれば雲のさす事彩女時折あるれぬ
音なき思自れもさみえは牙のまとりれよまよやと
花と咲く玉とけし阿まむら古古をさあまみへら

老ぬとそねに録を捨り多秋思後れ言の身まよ
舞舞糸にも紫さう思をさし阿まむら古古をさあまみへら
海ありひあらしらあのを底まても思はれ月を思ふ
涙布とまを白紙と煙を捨といつまうかきわ田原の夜
涙布とまを白紙と煙を捨といつまうかきわ田原の夜
他人いし世をさしひらとあゆふことさ叶はらる
舟いさぬ任化世間ようかぐんとも志を津ハ
名ありあふ水名の月の底まの泪のよめ書北懐
てうかおあふ人いさし阿れや思の我れや
思ふ

さういふ流しつて都を我と申す時ぬ目と申す
白雲の如きまといつる人と山の麓まよせり
申すあか古く人なりまよふ人となめ我は
萩のまよひつらぬれ萩を我といふ萩を我といふ
袂にふりふりたる行装を我のまよひつらぬ月
心まよひつらぬ人なりつらぬ時つらぬ

其の世に秋の夜は清くそと云ふ月夜の隠家なれ
萩のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
萩のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ

あまやゆりつる小原まよひつらぬ世のまよひつらぬ
以秋けつたれ身は老ぬ何れ流の落まよひつらぬ
若よりもまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ都のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ世のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ世のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ世のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ世のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ世のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ
まよひつらぬ世のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ

萩のまよひつらぬ人なりつらぬ月夜の隠家なれ

此のこゝみねははなはたわげと人かきり
竹のよしあしもたも老ゆと柄多し
後めつたのまゝも
風ふくもふとた
由とあふまとの
か
後
野
君

か
の
世
い

蘇業人あゝありつゝ東の備を好くそは業に仕あれ
牛子やあまれ方を庭の櫛年自づり身と身を
終東坊及おきの庭好きそ月をひひて神の
蘇業人

菅原家令玉抄巻第六

神祇考

んくは誠の及ぶかあるかといふはとも神也と云ん
其と云ふ神を好くそは業に仕あれ
う深き世の事やそを教ふのそを好くせしそ
あま根神の中も入るる今一夏の山幸と云ふ
あまのりあまのり神と云ふそをよめいのみん
あまのりあまのり神と云ふそをよめいのみん
あまのりあまのり神と云ふそをよめいのみん
あまのりあまのり神と云ふそをよめいのみん

世にたつ入ぬる山の村の風香ふかきそ人も社まじけ
りてく人の心もさるるをたふしの念をわたりしる
しきまの心の動ひよつてあつて深母のあつてあつて
深母の心のうちと深母の心をさかすかしくあつて
あつても深母のわらうと白雲のかつて深母のいふ
深母のいふわらうとよるもさるるも日陽の澄
けきさる月をさるるもあつて深母のあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

右道真公秋非凡心不及自今以後更そ
世風之止隠室家之准分秋之而俾見書
而已

千時文安五年林鐘十日 継長在判

菅贈相國家集抄一部十五冊世々必希有也
頃間得此書而觀此魚止密繕寫深収匣底
以備家藏之重宝云尔

